
日本地球化学会ニュース

No .160

2000 .3 .5

主な記事

● 学会記事

- 2000年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)
- 1999年度日本地球化学会年会の報告
- 評議員会，各種委員会議事録
- 鳥居基金実施報告
- 1999年日本地球化学会各賞受賞者の紹介

● その他の研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報

- 2000年度地球惑星科学関連学会合同大会のお知らせ
(連絡会ニュース)

現在，日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village の中で公開しております。URL アドレスは，
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html>
です。

2000年度日本地球化学会年会のお知らせ

主催：日本地球化学会

会期：2000年9月25日(月)～9月27日(水)

会場：山形大学小白川キャンパス教養教育棟(山形市)

内容：一般講演、ポスターセッション、課題討論、学会賞等受賞講演。総会と懇親会は9月26日(火)午後後に開催の予定です。

詳細は次号のニュースをご覧ください。課題討論の内容とコンピーナーも次号のニュースに発表します。

講演申込締め切り：2000年6月30日(金)

講演要旨締め切り：2000年7月28日(金)

参加申込締め切り：2000年9月1日(金)

申し込み方法の詳細は、次号のニュースをご覧ください。

年会連絡先：

〒990 8560 山形市小白川町1丁目4 12

山形大学理学部地球環境学科内

2000年度日本地球化学会年会準備委員会

齋藤和男

Tel：023 628 4649，Fax：023 628 4661

e-mail：kazsan@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

または、

同上

柳澤文孝

Tel：023 628 4648，Fax：023 628 4661

e-mail：yanagi@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

1999年度日本地球化学会年会的報告

年会準備委員会委員長

松久幸敬(地質調査所)

1999年度の日本地球化学会年会は、9月29日(水)から10月1日(金)の三日間にわたって、つくば市の工業技術院筑波研究センター共用講堂および地質調査所を会場として開催された。つくば地区での年会は、1985年以来、14年ぶりの開催であった。

年会の参加者総数は467名で、内訳は、会員事前登録238名(内学生57名)、非会員事前登録75名、当日登録154名(内会員71名、非会員83名)であった。講演総数は301件、内学会賞等受賞講演が5件、ポスターによる発表が78件であった。

課題討論として以下の4つのテーマを設定し、それ

ぞれ半日をあてた。(1)21世紀初頭の海洋地球化学の研究 海洋化学と地球環境研究の今後(コンピーナー：川幡穂高・益田晴恵)、(2)酸性雨研究と生物地球化学(コンピーナー：佐竹研一・鶴見実・中野孝教)、(3)地球化学における標準物質(コンピーナー：今井登・田中敦)、(4)太陽系初期の1000万年(コンピーナー：比屋根肇・塚本尚義)。いずれの課題討論も、会員外の講演者を積極的に取り入れて、スコープの広い、活発な討論会となった。この効果は一般講演の会場にも波及して、今年の年会は、全体に質疑・討論が活発であった。コンピーナー各位のご努力に感謝する。

ポスターセッションは共用講堂の多目的室とホワイエを会場として開催され、二日目の午後に1時間半のコアタイムをとって活発な議論が交わされた。ポスターセッションのあとに総会と学会賞等受賞講演会が開催された。今年は、柴田賞1名(酒井均会員)、学会賞1名(清水洋会員)、奨励賞3名(鈴木勝彦会員・三浦弥生会員・三村耕一会員)の方々を受賞され、それぞれの受賞講演があった。講演数が多いため総会の時間を切りつめるよう努力したが、齋藤議長、執行部と参加者のご協力で予定時間を30分切り上げて総会が終わってしまった。それでもなお、受賞講演の各講演時間は大分窮屈で、総会が不活発であることの問題は別として、総会が予定どおりの時間を要したらスケジュールに破綻をきたすところであった。受賞講演のあと、工業技術院食堂を会場にして懇親会が開催され、201名の参加をえて盛会であった。

学会をとりまく重要な課題については、総会で時間が充分とれないことを考慮して、第一日目の夜に将来計画委員会主催の小集会在開催され、45名の参加をえて、大学の再編と法人化、科研費審査制度の変更、地球環境科学研究所、海洋国際共同研究計画、環境地球化学の現状と将来、惑星科学の将来計画等の話題について、熱心な意見交換を行った。また、Goldschmidt Conference 日本開催について、経緯と進捗状況が紹介された。地球惑星科学関連学会合同大会の運営についても、現状と問題点が紹介された。

講演会場は例年どおり並列4会場であったが、つくばでの前回(1985年)の年会の際、共用講堂の小会議室が狭くて参加者が座りきれなかったため、今回は1会場を地質調査所の別棟会議室にとった。会場案内については充分の手当てをしたので大きな混乱はなかったと思うが、初めから懸念したとおり、他の会場と離れていたために、たまたまこの会場に当たった講演

者、参加者にはご不便をおかけしたことをお詫びいたします。大講堂での受賞講演のスクリーンの画像が後ろから見えにくかったようで、これはもっと明るくすることが可能だったことがあとで判って、主催者側の不手際でした。申し訳ありません。今回は、企業展示に7社の参加があつてありがたかったが、展示会場の前に衝立があつて、ホールから来た人にとって展示会場が見えにくかったのは誤算であつた。この点については、参加企業のみなさんにはご不満があつたと思う。

今年の年会の講演・登録受付は、昨年同様、郵送・電子メール・web上の学会ホームページの三本立てで行つたが、講演申し込みについては、総数301件のうち、web52%、電子メール34%、郵送等(FAX、手渡しを含む)14%であつた。昨年が各1/3づつであつたことを思うと、webの利用者が急速に増えていることが伺える。受付後の処理はwebによるものが圧倒的に便利である。なお、当学会の年会では、講演申し込みと要旨締め切りの期日が離れているため(日本化学会の「化学と工業」へプログラムを掲載するための日程上の制約があるためこのようになる)、締め切り日を失念してしまう人が少なくなく、要旨原稿が期日までに揃わないという問題がある。今年も原稿締め切り3日後で未着原稿が16件もあり、事務局が督促に追われた。また、要旨原稿の題名、著者名が講演申し込みと異なるものが68件(実に発表件数の1/5以上)もあり、そのうち著者が変更を申し出たものはわずか6件であつた。事務局では、結局、全講演について講演申し込み(「ニュース」および「化学と工業」掲載のプログラムはこれに基づいて作られている)と要旨原稿をつきあわせて、講演要旨集用のプログラムを作りなおした。これらの問題については、今後会員の自覚と注意を促すとともに、場合によっては学会として何らかの対策が必要ではないかと思う。

当学会の年会では、招待講演はもちろんであるが、それ以外の一般講演についても非会員にも広く門戸を開いており、非会員としての登録料さえ払えば誰でも講演することが出来る。今年は、冒頭で記したように、全体で158名(参加者総数の34%)もの非会員参加者があつた。さらに、招待講演12件を除く非会員による一般講演は83件にのぼつた。これは総講演数のおよそ28%にあたる。非会員にも年会講演の門戸を開くということについては、年会の活性化につながるという肯定的な意見と、会員であるメリットが少なくなる

のではないかという否定的な意見があつて一概に言えないが、講演総数の1/4強が非会員によるものであるということは、学会としてやや異常かもしれない。理想をいえば、これらの方々が、これを機会に日本地球化学会に入会してくださることだと思つたので、あるいは、これだけの方々が潜在的な会員候補としていらっしゃるということなので、今年の年会非会員講演者に対して入会の勧誘をしたらどうかと考えている。

例年、年会とリンクさせて開催している公開講演会は、今年は文部省の助成が得られなかつたため、財政・運営面で年会準備委員会がお世話をし、11月13日(午後1時30分～4時、つくばカピオホールを会場として独自の日本地球化学会普及講演会「身近な環境と化学 私たちの暮らしとダイオキシン」を開催した。当日は、ダイオキシンや環境汚染の問題に取り組んでいる3名の方に講演をお願いした。森田昌敏さん(国立環境研究所)には、「環境中のダイオキシン」の題で、ダイオキシンの発生から環境中での分布や分配、生物における濃縮など、環境中のダイオキシンの挙動と人との関わりについてお話しいただいた。佐古猛さん(工業技術院物質工学工業技術研究所)には、「水と空気中でダイオキシンを完全分解」という題で、500、250気圧の超臨界状態の水によるダイオキシンやその他の物質の分解技術についてお話しいただいた。山室真澄さん(工業技術院地質調査所)には、「環境汚染と生態系」という題で、生態系における食物連鎖と汚染物質の関係についてお話しいただいた。この日はつくばで他に色々な楽しい催しが重なつたことや、私たちの宣伝不足も原因して、残念ながら参加者はわずか35名であつたが、講演も興味深いものであつたし、参加した方々は非常に熱心に講演を聴いてくださり、また、質問も多数出て、内容は充実したものであつた。参加者の層も学生、研究者、会社員、主婦と幅広く、小学生も2名参加して、すばらしい質問をしてくださった。宣伝がへたというのは、地球化学会の我々が共通してかかえている課題ではないかと思うが、今回も工夫が必要であつた。

年会、普及講演会を通じて、地質調査所の会員および職員の方々や、アルバイトの方々のご協力を得て、無事終了することができたことを感謝いたします。

1999年度第4回(新旧合同)評議員会議事録

日時：1999年10月1日(金) 17:15～18:15

場所：地質調査所 843会議室

出席者：石渡良志会長，松久幸敬副会長，赤木右，海老原充，河村公隆，日下部実，斉藤和男，清水洋，高橋和也，中井俊一，長尾敬介，松田准一，本本尚義，吉田尚弘（以上評議員），野津憲治次期副会長，石橋純一郎，坂田将，佐竹洋，田中剛，富樫茂子，野崎義行，野尻幸宏，乗木新一郎，増澤敏行，益田晴恵，村江達士（以上次期評議員）

1. 1999年度第3回評議員会議事録の承認
2. 報告事項
 - 2.1 庶務：(なし)
 - 2.2 会計：(なし)
 - 2.3 編集
 - 2.3.1 GJ(松田評議員)：来年度から Invited Review という項目を新設することを検討中。
 - 2.3.2 地球化学(赤木評議員)：今後、執筆者の e-mail address を掲載する。
電子出版化(CD-ROM化)の可能性を検討中(次期への申し送り)。
 - 2.4 出版：(なし)
 - 2.5 行事
 - 2.5.1 1999年度年会(松久副会長)：年会の概要が報告され，次のニュースに掲載予定。
 - 2.5.2 2000年度年会(齋藤評議員)：来年の年会の課題討論の課題を募集する旨，次のニュースに掲載予定。
 - 2.6 会員：(なし)
 - 2.7 委員会
 - 2.7.1 Geochemical Society 対応委員会(松久副会長)：10月1日に委員会開催し，Goldschmidt Conference の日本開催に関して協議した。開催年は2003年を是とする意見が多かったが，今後開催地を決定する段階で開催地の意向を尊重して最終決定したい。2003年の場合，IUGG 開催次期との調整が必要である。年会とリンクするかどうか，リンクさせるとしたらそのような形が望ましいか今後の検討する。会場の候補地はつくば，東京，名古屋，広島の4カ所で，会場の収容人数，経費(地元からの財政サポートの有無等)，宿泊，交通の便等について，10月中に資料を集めて結論を出したい。
 - 2.8 学術会議：(なし)
 - 2.9 連絡会等
 - 2.9.1 地球惑星科学合同学会連絡会(篠原評議員)：

9月28日に決まった内容を連絡会に伝えた。

3. 審議事項
 - 3.1 次期評議員会への申し送り
 - 1) 地球化学・宇宙化学研連との関係
今後ともこれまでどおり，パイプを維持することに留意してもらいたい。
 - 2) 幹事会の位置づけ
幹事会の位置づけ，役割，構成等について，会則等で規定することを検討する必要がある。
 - 3) GS 対応委員会
Goldschmidt Conference 対応の部分は一応の決着を見たが，広い意味での GS との対応については課題が残されている点に留意して欲しい。
 - 4) 将来計画委員会のあり方
本委員会や他の委員会の委員長を副会長が兼務することがこれまで慣例として行われてきたが，多忙のため十分な活動ができないくらいがあるので，今後改善を図る必要がある。
 - 5) 黒田基金の運用方法
会計上，一般会計と分けることになった。運用方法については，次期の評議員会で検討する必要がある。
 - 6) GJ 電子出版化への対応
文部省からの強い要請もあり，テラ学術出版社との交渉を含めて早急に対応する必要がある。基本方針は前評議員会で決めたが，Web 上での GJ 公開の効果を見極め，今後の方針を検討するための体制を早急に作る必要がある。
 - 7) 「地球化学」出版のあり方
GJ とともに，「地球化学」出版のあり方，内容等について検討する必要がある。
 - 8) 評議員の構成
女性や企業人の評議員選出を積極的にはかり，評議員の年齢構成，専門分野構成をどの様にバランスさせるかを検討する必要がある。
 - 9) 会員サービス
会員の意見を取り入れられるよう，ホームページの積極的な活用をはかることを検討されたい。
 - 10) 学会活動の活性化
学会活動の活性化，拡大化を図る上で，周辺領域の研究者に地球化学会に入って活躍してもらえよう，部会を創設するなどの方策を検討してもらいたい。
 - 11) 年会準備の開始時期

講演申し込み時のタイトルと講演要旨のタイトルが食い違うケースが多い。講演申し込みと要旨締め切りの時期について 検討する必要がある。

以上

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 (第17期・第7回) 議事録

日時：1999年11月29日(月) 13：30～17：20

場所：日本学術会議第4部会議室（6階）

出席者：野津憲治委員長，青木謙一郎，日下部実，田中剛，半田暢彦，松田准一，矢内桂三，山中健生 各委員

1．報告事項

(1) 学術会議関係（青木委員より）

1999年8月5日に第4部会，10月25日～28日に第131回総会，連合部会や部会と日本学術会議50周年記念式典などがおこなわれた。

A．第131回総会

勧告『わが国の大学等における研究環境の改善について』の採択。

声明『日本学術会議の自己改革』および『日本学術会議の位置付けに関する見解』の採択。前者は，日本学術会議の活動活性化の改善策を，後者は行政改革後の学術会議が内閣府所管となるべきことを主張したもの。

国立大学の独立法人化問題に関する討議。『この問題は，効率化の視点のみでなく，長期的視点からの意見を広く聴取し，慎重におこなうべきである』との会長談話を発表。

『安全に関する緊急委員会』の発足

B．第4部会

上記『日本学術会議の自己改革』案について意見交換。総合科学技術会議との関係など多くの点については賛成意見が多いが，登録団体の規模の問題や会員が会員を選ぶようにする問題などには慎重な発言が多かった。

理学の振興について

国立研究機関および研究者を対象とした“理学の研究費”に対するアンケート調査を行った。その解析結果をうけた対外報告書案に意見を求めた。

(2) 理学総合連絡会議関係（野津委員より）

上記(1)の報告以外で，科学研究費補助金の分科細目別対応研究連絡委員会を確定した。

(3) 第17期6回議事録中審議事項(2)B.の科学研究費第2段審査委員枠の見直しについての要望書提出は，見送ることにした。

2．審議事項

(1) 学術会議の改革について

声明『日本学術会議の自己改革』および『日本学術会議の位置付けに関する見解』について意見交換を行い，研連の改革は第18期の最大課題になるであろうとの見通しが述べられた。

(2) 科学研究費審査委員推薦について

本研連で行っている科学研究費分科『地球科学』，細目『地球化学』の審査委員候補者の推薦について，現在のように多くの学協会に依頼する意義があるか否かについて意見を交換した。

(3) 研連の国際対応について

研連の存在意義のひとつに，国際対応の窓口としての役割がある。

本研連はIAGC (International Association of Geochemistry and Cosmochemistry) の日本側対応団体となっている。構成は個人会員と国会員からなっており，日本は，22名の個人会員に加えて国会員でもあり，学術会議が分担金を支払っている。IAGCは，シンポジウムの開催，Appl. Geochem. の出版，Water-Rock InteractionなどのWG活動，を行っている。IAGCの創設には故菅原健氏が尽力し，その後，久城育夫，増田彰正，木越邦彦，酒井均(会長)，小嶋稔，の各氏が役員として，日本との密接な関係を保ってきた。最近，本研連あるいは日本地球化学会とIAGCの関係が希薄になっているのではないかとの見方があり，その原因と役員の推薦などによる密接な関係の維持について意見交換がなされた。

また，2004年のGoldschmidt国際会議開催に際しては，研連としても積極的に協力することが確認された。

(4) 平成12年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦

矢内桂三委員のIAGC(ブラジル)，田中剛委員の隕石学会(アメリカ)派遣を推薦することにした。

(5) 第四部対外報告『理学の振興について(仮題)』について意見交換を行った。

理念は良いが，対外報告ではインパクトが少ないのでは，との見方があった。

(6) 地球化学・宇宙化学の推進について：とくに国立大学の独立行政法人化への対応および総合地球環境学研究所（仮称）への対応についてそれぞれの委員が情報を紹介しあった。

(7) その他

次回（第8回）委員会は4月3日（月）13時30分からを予定。

日本学術会議第17期第7回鉱床学 専門委員会議事録

日時：1999年11月12日（火）15：45～17：00

場所：日本学術会議第5会議室（6階）

出席者：松枝大治（委員長代行）、石渡明、上野宏共、島田允亮（中嶋悟の後任）、千葉仁、根建心具、渡辺洵（以上7名、欠席：島崎英彦・溝田忠人）

（議事）

(1) 諸報告

1. 第131回総会の報告

平成11年10月25～28日に日本学術会議第131回総会と日本学術会議50周年式典があった。その結果として次のような談話・勧告・声明が発表された

「国立大学の独立法人化問題に関する日本学術会議会長談話」

（平成11年10月27日 吉川弘之）

独法化は慎重に進めるべき。

「我が国の大学等における研究環境の改善について（勧告）」

（平成11年10月27日 第131回総会）

我が国の理系大学の設備は欧米に比べて劣悪である。

「日本学術会議の位置付けに関する見解（声明）」

（平成11年10月27日 第131回総会）

省庁再編に伴い、学術会議は現在の総理府所属から「総務省」所属になる。これは格下げではないか。

「日本学術会議の自己改革について（声明）」

（平成11年10月27日 第131回総会）

研究連絡委員会や専門委員会の大規模な再編。

【これらの文書は日本学術会議のホームページ <http://www.scj.go.jp/>で閲覧できる。】

この他、「安全に関する緊急会議」（東海村臨界事故対応）が開かれた。

2. 理学データネットワーク推進委員会

東工大の河村雄行氏を中心とするワーキンググループで進められている。

3. 学術会議の改革（上記1の声明参照）

学術会議自体の存続問題に発展してきたので、第17期中に予定されていた研連の見直しはやらないことになった。しかし、科研費の「分科・細目」毎に1対1に対応する研連にまとめるべきだとする考えもあり、今後も検討を進める。

参考資料 現在の科研費の分科・細目と研連の対応関係

| 分科 | 細目 | 研連 |
|------|-----------|------------------------|
| 地球科学 | 固体地球物理学 | 地球物理・測地・地震・火山・地球電磁気・極地 |
| | 気象海洋物理陸水学 | 地球物理・気象・海洋物理・陸水・極地 |
| | 超高層物理学 | 地球物理・地球電磁気・極地・宇宙空間 |
| | 地質学 | 地質科学総合・極地 |
| | 層位・古生物学 | 地質科学総合 |
| | 岩石・鉱物・鉱床学 | 地質科学総合・鉱物・極地・結晶 |
| | 地球化学 | 地球化学・宇宙化学・鉱物学 |

4. 理学の振興について

大学の独立行政法人化は既に「やるかやらないか」という議論の段階ではなく、必ず行われると考えた方がよい。しかし、独法化そのものよりも、平成13年度から予算の配分方式が変わり、校費が大幅に（1/3～1/5に）削減されることの方が問題である。大学間の配分格差も大きくなるだろう。

(2) 委員長及び委員の交代（または代行）について

まず、島崎英彦委員長が委員長職を辞任したが、第17期も残り少ないので、新しい委員長は選出せず、幹事の松枝大治委員が代行を勤めることで承認された。岩鉱学会推薦の中嶋 悟委員の辞任については、九州大学の島田允亮委員が後任を勤めることが承認された（今回出席）。新しい幹事（書記）には石渡 明委員が当たることになった。

(3) 鉱床学専門委員会の対外報告について

本専門委員会が第17期中に作成した対外報告「我が国における鉱床学の研究・教育の推進について」が、9月20日の日本学術会議運営審議会で、上野宏共委員（島崎英彦委員長の代理）から提案・了承され、さらに10月25～26日の日本学術会議総会で承認された。今委員会では、この対外報告の発送先について議論があり、文部省、通産省、関連する国会議員、理学系学部をもつ大学の学長、関連する研究所などの長に送るこ

とになった。

(4) 第17期鉱床学専門委員会の活動内容について

対外報告を発表できたことが、今期の委員会の最大の成果だということでした。しかし、対外報告の内容に対しては、記者会見で「なぜ純粋科学ではいけないのか」といった質問が記者から出たとの報告があり、鉱床学の「役に立つ科学」としての面ばかり強調しすぎたという反省が一部の委員から出た。また、第16期では、全国の鉱床学関係の大学の教室の教官及び学生のリストを作成したが、今期も作成する必要があるかどうか議論があった。対外報告を出したことであり、現状を把握する必要があるので、作成する方向が承認された。

(5) その他

来期に予定されている研連の見なおし問題に関して、今後の鉱床学専門委員会の対応について、第17期の残りの時間で議論を行ってゆくこととした。

来年度学術会議派遣の国際会議出席者に対する補助の申請について、松枝大治委員から説明があった（会議後電子メールにて）。

以上

1999年度第1回「鳥居基金」助成実施報告
(TE 21)

氏名：松本拓也（大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻助手）

助成：海外渡航（アメリカ合衆国）

課題：AGU1999Fall Meetingにおける研究発表

この度、日本地球化学会より「鳥居基金」として資金援助をいただき AGU1999Fall Meeting に参加しました。12月だというのに気温は16～17 と温暖で非常に過ごしやすい1週間でした。5日間の総講演数は約7,000（ほぼ3/4がポスター）、13のセッションと共通のユニオンセッションが連日平行して行われました。ユニオンセッションはそれぞれの分野のリーダー的存在の研究者達がどちらかと言えばレビュー的な話をしながら議論するといった色合いが強く、地球化学では The Solid Earth's Chemistry: Global Inventories and Fluxes というユニオンセッションが R van der

Hilst (MIT) と A Hofman (Max Planck Institut) のチェアで行われ、Wood, Kellog, Hauri, Ozima, Albraede, Langmuir, Arndt, Rudnick 等々がそれぞれの成果を取り入れながら現在の地球の化学的貯蔵庫やそれらの物質循環史などについて話し、非常に聞き応えがありました。

私はそのユニオンセッションとは別の Volcanology, Geochemistry, and Petrology というセッションの Lithosphere, Young and Old (Vervoort と Rudnick がチェア) セクションで「Nitrogen, Argon and Helium in the subcontinental mantle xenoliths from Southeastern Australia: Subduction process revealed」という講演を行いました。チェアの Rudnick や同じセッションで講演をおこなった McDonough には学生時代に ANU でかなりお世話になり、帰国後の自分を審査されるような気分で少し緊張したのですが、発表はスムーズに進めることが出来ました。同じセッションで2つの講演がキャンセルされたため時間的にも余裕があり、15分の割当を大幅に過ぎるほどのコメントと質問が出され、それぞれに答えることも出来ました。博士論文の審査員の一人であった MIT の Prof. Frey からは、まさに口頭試問の様な質問が出されて（用いた試料の岩石学的な特徴と実験結果の関連について述べよ、といったものでした）、私が半分くらい答えたところで彼は、知ってるんだったらもういいよ、という感じで最後までは聞きませんでした。再び口頭試問を受けたような気分になりました。講演後に個人的にコメントをしてくれる研究者もいましたが、「大陸下のマンツルのリソスフェアには希ガス同位体組成からは見えない堆積物起源の窒素があり、ある程度の深さまでは揮発成分もサブダクションによってマンツルにリサイクルされ、しかもそれが長期に渡って保持される可能性がある」と言う私の主張はおおむね興味を持って迎えられたという印象を受けました。

最後に、今回の海外派遣で数多くの最新の研究成果に触れることができ、今後の私の研究にとっても非常に意義深いものになりました。日本地球化学会および関連された各位に深く感謝いたします。

提出日：1999年12月21日

1999年日本地球化学会各賞受賞者の紹介

以下の方々が1999年度の柴田賞、学会賞及び奨励賞を受賞されました。各氏を知る方々に、紹介文を寄稿していただきました。

柴田賞：酒井 均先生（岡山大学名誉教授）

受賞課題「安定同位体の地球化学および海底熱水系・冷湧水系の研究」



酒井均先生は、1953年東京大学理学部化学科を卒業され、1958年に理学博士の学位をお取りになった後、1958～1960年カナダのマクマスター大学、1960～1961年米国イェール大学で研究員として同位体地球化学の草分けの研究をなさいました。その後帰国されて、1962年に岡山大学温泉研究所に赴任され、1968年同教授（1978～1982年は同所長）、1983年からは東京大学海洋研究所教授、さらに1991年からは山形大学教授を歴任され、1996年に退官されました。この間、黎明期にあったわが国の安定同位体地球化学の研究で指導的役割を果たしたばかりでなく、この分野の研究で常に世界をリードしてきました。その業績で、1981年には米国地質学会（GSA）の Honorary Fellow に選ばれています。同年、地球化学研究協会の三宅賞を受賞されました。また、1992～1996年の間、国際地球化学宇宙化学協会（IAGC）の会長を務められ、地球化学・宇宙化学の国際的發展に貢献されました。

地球化学の研究というのは、フィールドワークと実験室と理論的研究の3つの要素があって、理想をいえば本来3つとも揃っていなければならないわけですが、たいていはそのうちどれかが得意で（あるいはどれかが苦手で）、我々は得意でないものについては避けて通りがちです。ところが、酒井先生のお仕事の特長は、その3つの要素が大変よくバランスしていることです。これは、私が学生時代からそばにいて常々感じていたことで、そこを学ばなければと思いつつ、今にいたるまで自分では実現できないでいることです。

安定同位体の地球化学についていえば、いまや世界の古典的論文となった硫黄同位体分別に関する理論的研究がありますし、温泉や火山噴気、鉱床を含めたフィールドワークをもとにした熱水系の体系的な研究があります。また、同位体交換反応に関する多くの実験

的研究をやっておられますが、その着想が、いつもフィールドの実際と理論的考察に裏付けられて的確で、なるほどと思わせられます。地球化学者は、同位体平衡や化学平衡を仮定して自然界を論じがちですが、先生は、年会の受賞記念講演で、地球化学的に重要な化学種である硫酸と硫化水素、硫酸と水、燐酸と水の間の同位体交換反応において、それらの反応速度の実際がどのようなものか、また、それが自然界の同位体比の分布にどのように係わっているか、ご自身の実験的研究をもとに、自然界における反応速度の重要性をご指摘になりました。また、先生の魅力の一つは、お作りになる実験装置にあります。1960年代はじめ、既存の実験装置のほとんどない時代、岡山大学温泉研究所で仕事を始めるにあたって、質量分析計を自ら製作されたことをはじめとして、存在形態の異なる種々の地質学的試料の同位体比分析法を開発されましたが、そこには先生の chemist としての広い知識と経験に加えて、柔軟な発想と創意工夫があふれています。世界の同位体地球化学の進展におけるこの面での先生の貢献は多大なものがあります。

先生は、1983年に東京大学海洋研究所に移られ、陸域の熱水系の研究で成果をあげた安定同位体の研究手法を海洋底の研究へ拡張し、ときには自ら「しんかい2000」に乗り込んで、ハワイ・ロイヒ海山、沖縄トラフ背弧海盆、ビスマルク海・マヌス海盆等の海底熱水系や、南海トラフ、相模トラフにおけるプレート沈み込みに伴う冷湧水系の地球化学的研究に活躍されました。沖縄トラフの二酸化炭素ガスハイドレートの発見は、現場で見た某氏が気づかなかったものを、ビデオをご覧になった先生が真っ先に気づかれたことなど、先生の対象に対する柔軟な発想を如実に示すエピソードではないかと思えます。ご存知の方も多いと思いますが、先生は最近「地球と生命の起源」という本をお書きになっていらっしゃるようですが、この本は、先生の柔軟な発想が最近何に向けられているかを示すものと思えます。一読をお勧めします（「日本地球化学会ニュース」No.158参照）。

先生は数年前に大病をされ、その後お元気になりましたが、まだ通院を続けておられます。1996年に出版された「安定同位体地球化学」はそのような状況のなかで執筆されたもので、微力ながら私もお手伝いすることになったのですが、執筆中に立場は逆になって、先生の精力的な筆（パソコン）とあくなき探求心におられる結果となりました。このときの共同作業

で、ご自分が関心を持っておられることがらをとことん追求するという先生の姿勢から、大いに刺激を受けました。先生のまわりには、昔から、もぐりの学生(私もそのひとり)や正規の学生、研究室スタッフと、怪しげな人からまともな人までが大勢いましたが、皆先生からの刺激を受けて個性的に育っていったと思います。先生の今後のご健勝をお祈り申し上げます。

松久幸敬(地質調査所)

日本地球化学会賞：清水 洋会員(広島大学理学部)
受賞課題「地殻の初期進化に関する地球化学的研究」



1999年、つまり千年紀最後の日本地球化学会学会賞を清水洋会員が受賞されました。清水会員により、希土類元素存在度に基づく地球化学、同位体地学さらに年代学の基礎について手ほどきを受け、教わってきた方々が多く輩出されました。

そこで、清水会員の受賞を機会に、清水会員を知る方、あるいは清水会員に教えを受けた後輩の方々に、教わったこと、あるいは共同で仕事をされた経験など等々を語っていただく事により、清水会員の業績、素顔を紹介し、それをもって学会賞受賞の紹介記事としてみる事にいたします。

清水先生(以降清水先生あるいは清水さんと呼ばせていただきます)はこれまで、神戸大学、東京大学、熊本大学、そして現在は広島大学において、研究、教育活動に携わってこられました。特に、東京大学には昭和56年より11年間に在職され、増田彰正教授の主宰される研究室のメインスタッフでいらっしゃいました。その期間に多くの研究者の方が、世に出られています。東京大学で増田研究室が立ち上がった当時は、研究室には設備と言えば古い質量分析計(それでも、この測定器が研究の主力でした)が1台きりで化学実験からすべてを自前で整備しなければならない時代でした。その当時の清水先生を振り返り、国立科学博物館の米田さんより以下の1文を寄せていただきました。

我々が卒業研究として分析化学講座の増田研究室に入ったのは1981年の秋でした。清水先生はこの年の春に増田教授とともに神戸大学から東京大学に移って来られていました。当時は前の研究室の教官の方もいらっしゃいましたが、できたての増田研究室の切り盛りはすべて助手の清水先生一人の肩にかかっていました。測定装置はJEOLの古いマスが一台、化学実験

室の整備もまだこれからという時に、右も左も分からない卒業研究生4人の面倒を見なければならなくなったのです。……研究どころか事務・雑用に追われてとてもたいへんな時期だったと思います。しかしこれがのちの増田研究室の原動力になっていると思います。清水先生はイライラすると眼鏡をいじったり持ち上げたりする癖があります。我々学生にはいつもここにこと接して下さり、つまらない質問にも答えてくださいました。それでも、夕方、清水先生のお眼鏡が指紋で汚れているのを見ると、「今日はたいへんだったよだから質問するのはやめよう」とささやきあったものでした。「僕は隕石を専門にするつもりはないんだけど……」とおっしゃいながらも、隕石を専門として博士課程まで進んだ我々二人をずっとサポートしてくださいました。言葉で表せないほど感謝しております。

増田研究室の設備が充実していく環境下で、当時、研究者として成長を期待されていた方々の中で、京大、地球熱学研究施設、鈴木さんからは、研究面での指導、東大、地殻化学の鍵さんからは、学生あるいは後輩として教え導かれた全般的な印象を語る文章を寄せていただきました。

清水さんの研究実績は今さら言うまでも無いでしょうが、もう一つ、後進を育てるという大きな功績があります。指導している学生も含めて、若手が十分に仕事ができるように常に心がけているようです。それは、清水さんの口癖「若い人がいい仕事ができれば……」というフレーズに象徴されているように思います。特に、ご本人は気づいていないかも知れませんが、がんばっている若手あるいは学生に対して厳しいだけでなく、おだてて、ほめてその気にさせるのが特徴的です。私などはおだてられて木に登った一人で、持っていた力以上の物を引き出していただいたと感謝していますが、そのような元学生は少なくないでしょう。その心理は親にいいところを見てもらいたい子供に通じるところがあるかも知れません。既に仕事に就いて何年も過ぎるのに、今でも電話で話すととき、別件でかけたのに、実験で出た結果を聞いてもらいたくて、ついつい長くなってご迷惑をおかけすることもあります。

これからも周りの若い人をその気にさせて、たくさん地球化学者を育てていかれることと思います。今度は、既に「若い」の範ちゅうからはみ出している私自身、清水さんのように若い人をその気にさせるようになりたいと切に考えています。

清水先生、このたびは学会賞御受賞おめでとうございます。お世話になった者としてこの上なくうれしく思っております。私が進学した東大理学部増田研究室で助教授を勤められていた清水さん（と僭越ながら呼ばせていただいております）の印象的なお姿をいくつか御紹介させていただきます。一つはお机に向かって論文を書かれている姿です。当時、ワープロ（パソコン）が数という意味では普及しておりませんでしたので、清水先生は連続紙に打ち出された原稿にシャープペンシルで細かく書き込みをされながら論文を書かれておりました。助教授でいらしたにもかかわらず、我々学生と同じ部屋でしかも同じサイズの机を使われていました。さぞかし御不便であったかと思うのですが、朝から晩まで研究室で同居していた我々学生の騒音に惑わされることなくお仕事に集中されておりました。と思うと絶妙のタイミングで我々の（低レベルな）会話にも加わって下さることも日に何回かあり、私たちは清水先生の眼鏡の奥の優しい眼差しを見ると心が休まるものでした。また、我々学生が書いた論文を短時間にきめ細かく読んで下さり、適切なコメントを下さったことも清水先生の論文に対する集中力と執着心を物語っているかと思えます。二つ目はマジシャンのようなマスの腕です。私が鉛の同位体を表面電離型マスで測定していたころ、清水先生は一日に何度となく実験室の様子を見に来て下さいました。たいていはピークの形が美しくなかったり、いろいろと問題を抱えながら測定をしていたのですが、清水先生はあっという間に最高のコンディションに調整してしまいます。卒業研究で物理化学を学んできたばかりの私は、調整のためのロジックを学びとろうとしましたが、それは叶いませんでした。長年の経験が培ったプロの腕というようなものを感じました。三つ目は意外に思われる方も多いかと思いますが、清水先生は毎週土曜の夕方に開かれていた研究室での国際交流卓球大会を主催？されておりました。土曜日の午後三時頃になると当時研究室に在籍していた留学生が清水先生のところにやってきて、2時間ほど卓球で汗を流しておられました。卓球だけでなく研究室対抗のパレーボールでも御活躍していた姿を記憶しています。改めて思い起こしてみますと清水先生は「背中」で教育される先生と言えるかもしれません。清水先生の背中を見て育つ地球化学者がこれから数多く世界へ羽ばたいていくことを祈ります。

また、清水先生は東大の後、熊本大学、広島大学で

も先進的な研究に従事されていらっしゃいます。現在の清水先生の研究等について、広島大学、日高さんに紹介していただきました。

熊本大学理学部環境理学科在籍時の1998年4月から広島大学理学部地球惑星システム学科を一年間併任され、1999年4月から広島に赴任されました。以前から行ってこられた「希土類元素を中心とした微量元素存在度およびCe, Nd放射起源同位体のトレーサーとしての利用」から地球の進化過程を考える研究に加えて、現在、新しいスタッフとともに新たな研究分野に取り組んでおられます。最近、特に興味を持って取り組んでおられるテーマはエックス線分光学的手法をとり入れた「地球環境における微量元素の存在状態の解明」に関する研究だそうです。学外の研究機関との共同研究も積極的に行っておられ、大学内の委員会や授業などご多忙なスケジュールの間を縫って、年に幾度となく、自ら東濃地科学センター、理化学研究所、東大地震研究所、高エネルギー研究所に足を運ばれ、時には深夜におよぶ学生への研究指導にも励んでおられます。研究に対する真摯なお気持ちと学生に対する暖かい指導は私たちが学生であった十年以上も前のころから全くお変わりありません。先生の益々のご研究のご発展をお祈り申し上げます。

以上、清水先生の多様な研究、教育活動について、必ずしも充分な紹介には不足であったかもしれませんが、しかし、その一端を学生であった者の「生の声」で紹介することにより、学会賞にふさわしい業績の全貌を御推察いただく一助となれば幸いです。

（編集、文責：理化学研究所 高橋）

日本地球化学会奨励賞：鈴木勝彦会員（京都大学）

受賞課題「硫化鉱物のRe-Os年代測定法の確立」



鈴木勝彦君の業績を語るなら私は適任ではないであろう。93年3月に東京大学理学部化学専攻博士課程修了後、直ちに同大学教養学部化学教室助手として赴任して以来、最も身近に鈴木君の活躍する姿を見ていた者として少々取り止めのないことどもを記してみます。

彼はGeoscienceを志したのはすでに高校生の頃だったそうで、これは高校の先生の影響だと聞いています。世に良くある教師の故にその分野が嫌いになるケースとは正反対で、彼にとっても我々にとっても幸

福な事でした。

従って理学部で増田彰正研究室のドアをノックしたのも当然の成りゆきだったと思われます。彼は日本における希土類および同位体研究の中心研究室で、Re-Os年代決定法の確立に取り組みました。当時この年代決定法は硫化鉱床の直接年代決定法として、また地球深部における物質循環を探る方法として有望視され、フランス学派がデータを発表していたが、なぜか地球の年令以上の年代が出るなど問題点のある方法であったと聞いています。鈴木君はReを含む硫化鉱物試料であるモリブデナイトの化学処理に問題があることを突き止め、見事に信頼できる $^{187}\text{Re}/^{187}\text{Os}$ 比を求める方法を確立しました。

普通ある方法に伴う本質的困難を克服することをテーマとして研究を行うとき、特に期限が限られている場合、結果はall or nothingとなり易い。博士論文のテーマとしては危険度大である。まづ問題点を特定することが最大の難関となります。孤獨なチャレンジ。この間彼は一家の支柱である父を亡くしています。当時の彼の精神面を物語るサインとして激しい目ばたきが初対面の私の注意を引きました。そして指導教授の退官、恐らくこの頃は彼のこれまでの年月で最も苦しい研究生活の時ではなかったか。そしてそれは博士論文発表会での自信に満ちた発表となって一応の区切りがついたかに思われました。

駒場赴任は彼にアカデミックポジションを得たということでは安心を与えたかも知れない。他方余りの研究設備と研究費の少なさに大きな不安を持ったに違いない。事実、軌道に乗ったRe-Os Systematicsを駒場でさらに発展させ、のちに京都大学地球熱学研究所（別府）に配置換えになるまで、彼の研究に不可欠な質量分析装置はついに彼の手許になかったのです。全面的に東京大学海洋研究所の野崎義行教授の御援助に頼るほか無かったのです。

良い研究はどこかで誰かが支援して下さるものと見えて、彼も幸いに連続数年間科研費を獲得し、熊本大学（現広島大学）清水洋教授の御支援をいただきながらRe-Os年代決定法研究を進展させ、硫化鉱床のみならずケイ酸塩岩石にも応用可能とし、さらにマントルにおける白金族元素の挙動に関する研究に力を注ぎ始めています。今後の鈴木君の研究上の視座は本誌33巻第2号に発表された総説に良く現われています。

新天地で異好幸教授のもと雑用から解放されて大きく研究を飛躍させつつある彼を地理的にも心理的にも

遠くから眺めているのは、ちょっとばかり親の気分に近いものがあります。

高野穆一郎（東京大学）

日本地球化学会奨励賞：三浦弥生会員

（東京大学地震研究所）

受賞課題「分化した隕石の希ガス同位体による年代測定」



三浦氏さんは、希ガス同位体比分析に基づく隕石研究を一貫して続けて来た。特筆すべき点は、自らが希ガス質量分析装置の改造・改良を手がけて高い分析精度と操作性の良い装置を作り上げ、この装置を使って以下に述べる研究成果を達成したことである。

三浦さんは、岡山大学の修士課程の学生として1989年に岡山大学地球内部研究センター（当時）に入学した。ちょうどこのとき、年代学部門に二台のVG5400希ガス質量分析計とそれぞれに付属する希ガス抽出精製装置の設置が始まった。この装置のうちの一台を使って三浦さんは、宇宙線照射によって隕石中に生成する極めて微量（最も多く含む隕石中で10~13 ccSTP/g）の放射性核種 ^{81}Kr を定量し、隕石の宇宙線照射年代として最も信頼度の高い $^{81}\text{Kr}-\text{Kr}$ 年代と、 ^{81}Kr を用いた南極隕石の落下年代を測定する研究を始めた。 ^{81}Kr 測定をターゲットにした理由は、普通コンドライト（ordinary chondrite）中の含有量が（ $2 \sim 3 \times 10^{-14}$ ccSTP/g以下という極微量であるため、測定できる研究室は世界でも希であることと、 ^{81}Kr が精度良く測定できるということは装置と分析技術の上で世界のトップレベルに達したことを意味するためであった。自作の質量分析計で仕事をしていた我々にとって、既製品の質量分析計を使うのは初めての経験であったので、この世界的に名の通ったVG5400が、 ^{81}Kr を含む極微量全希ガス測定を能率的に行うことを目的とした場合、使い物にならない代物であることがわかって大変驚いたものである。このため、外国人技術者によるインストール後、直ちに装置の改造に取りかかった。ここで行った装置の改造・改良は小手先のものではなく、付属コンピュータを取り外してヒューレットパッカードのコンピュータを使って装置の制御及びデータ処理のためのコンピュータ・プログラミングを新たに作り上げ、イオン源、イオンコレク

タに手を加えて感度を上げ、イオン検出器回路を徹底的に低ノイズ化するなど、あらゆる改良を施した。三浦さんの現在までの希ガス研究は、こうして改良した希ガス分析装置とそのときの経験とを基礎にしている。

修士の研究で、分化した隕石であるユークライト隕石の $^{81}\text{Kr}-\text{Kr}$ 法による宇宙線照射年代測定を確立した後、東京大学大学院の地球物理学専攻（博士課程）に進学した三浦さんは、岡山大学の装置を使った隕石希ガス研究を続けるとともに隕石の窒素同位体の研究も始めた。そして主として HED（Howardite, Eucrite, Diogenite）隕石を対象とした ^{81}Kr 照射年代・落下年代測定により、これら隕石が HED 隕石母天体で起こった何度かの大きな衝突事件によって太陽系空間に放出されたことを示した。さらに、このデータに基づいて南極隕石落下群の同定をおこない、やまと裸水域で採取されたユークライトが単一落下隕石の破片やシャワーでなく、ポリミクトユークライトは5回以上、モノミクトユークライトは1回以上の別々の隕石落下によるものであることを明らかにした。また、消滅核種 ^{244}Pu の核分裂起源 Xe を測定して、母天体上でユークライトが固化した時に ^{244}Pu が $0.4\sim 1.1$ ppb 存在していたこと、 $^{244}\text{Pu}-\text{Xe}$ 相対年代を決定して、太陽系形成初期における数千万年の分解能の年代測定が可能であることを示すとともに、ユークライトは HED 母天体上で太陽系初期の約1億年の間におこった火成活動の産物であることを明らかにしてきた。

火星の生物の痕跡があるとして一躍有名になった ALH84001 の希ガスを世界に先駆けて分析し、ダイオジェナイトと間違っていた分類されていたこの隕石が火星起源隕石であるという希ガスからの証拠を、1994年 NASA で開かれた月惑星シンポジウムのアブストラクトとして最初に提出したのも、三浦さんの大きな業績の一つである。

以上が受賞対象となった研究の紹介ですが、三浦さんは、希ガスを主体とした隕石研究の継続はもちろんのこと、惑星探査計画にも参加するなど、広い宇宙科学に研究の幅を広げていますので、今後の発展に期待しています。

長尾敬介（東京大学）

日本地球化学会奨励賞：三村耕一会員（名古屋大学） 受賞課題「マントル有機物の起源に関する研究」



学問は従来 of 成果を基礎として進歩することはいうまでもないが、研究はそれに捉われすぎると単なる追試となって面白くもおかしくもない結果となる。世に秀才と呼ばれる人は既存のマニュアルからの脱却がかえって困難である

場合がある。太平洋戦争の時、軍学校での優等生は陸海軍とも、日露戦争時代のマニユエルで戦って、見事失敗したのはこの類であろう。軍学校時代の劣等生がよく働いたという例は戦史に詳しい。ここに紹介する三村耕一君は経歴的には優等生ではなかった。内情をいって浪して名大に入り、教養課程でもワンゲルに没頭し、成績も決してよくなかった。こういう学生には外れてももともと、無責任なテーマをやって貰ったのだが、既存の観念に捉われない分野をまっしぐらに進み、奨励賞まで頂いたのだから、学校の成績はあまり当てにならない。

地球化学の分野では天然における有機物は生物活動と関連して研究されるのが常識である。しかし三村君はこの常識にこだわらず、さりとて無機起源説に捉われることもなく、自然現象とともに様々に変化する炭素・水素・酸素・窒素から成る化合物としての有機物の実態を解明すべく研究を進めている。火成岩が、メタン・エタンなどの“有機物”を包有することから、これらの岩石がさらに高分子の有機物を含むのではないかと考え、世界各地から多くの火成岩を採取し、抽出・分析を行った結果、石油酷似の有機物を検出し、しかもこれらを含む岩石は、マントルと密接に関係する岩石のみであることを見出した。そして、岩石の産状、種類、形態の比較や、実験操作の空実験の結果、これらは汚染されたものではないと結論した。

これら有機物の起源を探るため、三村君は衝撃実験も試みた。初期地球では無数の隕石が衝突、集積して激しい衝撃波が発生していた可能性が強いから、新たに実験装置を開発し、衝撃下での有機物の組成変化と反応機構を調べた。出発物質としては、地球惑星科学的に重要と考えられている一酸化炭素・水素混合ガス、ヘキサンなどを用い、種々な有機反応が起こることを確認した。とくに、隕石中に存在し、生命の起源にも関連したと考えられている芳香族炭化水素（PAHs）の一つであるベンゼンについて検討し、基

底状態でベンゼンから Diels–Alder 反応及び脱水素反応を含む協奏的付加反応が衝撃反応の機構であると推論した。また、彼は宇宙環境を想定した液体窒素温度でも衝撃反応を行い、室温のものと同様の結果を得ている。さらに、隕石が集積して地球を形成した後、その有機物が果たしてマントルのような高压高温条件で現在に至るまで安定に存在し得るか否かを追求するため、1997年から2年間、米国地質調査所において石油地質学者の Price 博士と共に研究した。同博士は彼の論文を読み、それに共鳴して共同研究を呼びかけてきたものである。これらの成果に注目したカリフォルニア大学の Helgeson 教授は、アメリカ地質学会の1999年会で“New insight on organic metamorphism in the earth”という討論会に三村君を招待講演者に指名した。これには前述の Price 博士やワシントン大学の Shock 教授など、この分野の著名な学者が参加している。

三村君はなにか(ワングルもそうだが)に没頭すると並外れた実行力を発揮する。これは強靱な体力に裏打ちされている。私は彼と Newfoundland の ophiolite のサンプリングに赴いた際、山で霧に巻かれて危うく遭難しかかったが、彼はたくさんの石をいれたずっしりと重いリックを軽々とかつぎながら、不完全な地形図とコンパスだけで誘導し、見事に危地を脱した経験がある。私はこの様な彼の類い希な行動力が今後も研究の成果につながって行くであろうことを強く期待している。

杉崎隆一(名城大学)

中井信之先生のご逝去を悼む

名古屋大学名誉教授 中井信之先生は平成11年8月5日夕刻、名古屋大学医学部付属病院で肺ガンのため逝去されました。享年71歳でした。先生にとっての71歳はお若く、これからも研究にビジネスに活躍していただきたかったのですが、ここに先生を失うことになり痛恨の念に耐えません。

先生は昭和3年大阪でお生まれになり、大阪池田中学校(現池田高校)卒業後、昭和24年、旧制名古屋大学理学部化学科に入学、昭和27年3月卒業、同年4月名古屋大学理学部地球科学科の助手になられました。日本初の地球科学教室は地質学・地球物理学・地球化学を3本柱とした新しい学問領域を目指しており、地球化学の講座は小穴進也教授と松尾禎士助手(故人)と中井信之助手の布陣で出発しました。

中井先生は天然ガスや地下水の研究に従事された後、昭和34年から約3年間、アメリカ合衆国 Yale 大学地質学教室の Jensen 博士のもとで硫黄同位体分別の実験を行い、帰国後も熱水条件における、硫化物と硫酸など硫黄の化学種間の同位体分別係数を求める研究を進展させてきました。その後、火山ガスや地熱地域のイオウ同位体の研究のほか、Yale 大学以来の硫酸還元バクテリアによる、硫化水素と硫酸イオンの同位体分別、また、さらに堆積物中の深部に存在するメタン発酵バクテリアによる炭素同位体の分別を調べる研究など、現在新たな生物圏として注目されている地下生物圏の先駆的研究を始められました。同じころ、大気汚染物質である雨水中のイオウ化合物の同位体をトレーサーとし、産業活動による大気汚染の証拠を示されました。

昭和48年から50年にかけて行われた、日本とアメリカ、ニュージーランドの3国共同南極 Dry Valley 掘削計画の日本側隊長として指揮を執り、長年南極のこの地域の地球化学研究の基礎を作ってきた鳥居鉄也博士と共に活躍されました。この共同研究により、Dry Valley 地域の淡水湖の起源や、南極オアシスとも呼ばれる無氷河地域の歴史を明らかにするための湖沼の同位体研究が進められました。

昭和52年頃から、中井先生にとっても全く新たな方向を指向する研究を始められました。それが、加速器を使った極微量の放射性炭素14を直接質量分析する画期的方法の導入計画です。そして、昭和57年に日本で初めてのタンデム型加速器質量分析計が導入されることになりました。最初は、学内共同施設である RI 総合センターの分室として設立され、のちに現在の年代試料測定研究センターとして、今日ある学内共同施設の基礎を作られました。その間、考古学的試料や、氷河期ナウマン象の時代決定、また、熱帯材木樹幹から、核実験の異常放射能年輪を見つけだし、年輪のない樹木の成長速度を出したり、偽象牙事件では、マンモスの牙と偽った象牙の年代測定によって、現在の密輸象牙であることを突き止めたり、微量試料の測定ならではの社会性の多い課題にも挑戦されてきました。この間には、中国にも招聘され、現在も驚くべき速度で石灰華の成長が進んでる西安北方の調査と日本への紹介など話題性の多い仕事をされました。

1991年名古屋大学定年後は、株式会社地球科学研究所を設立され、国内外の広い人脈を通して放射性炭素年代測定から安定同位体分析など、ご自身の研究に加

えて直接の社会的貢献にも努めておられました。

先生は、昨年暮れ頃風邪を召されて、その直りの悪いことから、今年平成11年正月すぎに、検査入院のため前掲の病院で検査を受けました。この時には、肺に水がたまっていることが発見され、その摘出処置がなされましたが、そのときは肺ガンは発見されていませんでした。一度退院されたましたが回復が思わしくなく、再度入院し、精密検査によって左肺の奥に腫瘍らしきものが発見されました。生検査の結果、肺ガン特有の悪性ウイルスであることが判明、すでにいくつかの骨に転移していることがわかり、化学治療等の方法もすでにできない状態となっていました。先生は、告知を選ばれそのように覚悟を決められたようでした。6月頃からは、痛みが激しくモルヒネを投与するようになり、闘病生活も苦しいものとなっていたようでした。8月に入り病状は予断を許さなくなり、ついに8月5日夕刻5時30分頃帰らぬ人となりました。

名古屋大学の地球科学科設立の精神である地質学・地球物理・地球化学の3本柱を維持して、広く地球の進化を研究しようとする中であって、いつも多くの人との穏やかな対話情報交換に尽力され、特に年代試料測定研究センター発足後は、理学部地球科学教室のみならず、人文系の地理や考古学など、また農学部の木材関連の方々との交流など非常に幅広い共同研究を進められ、中井先生でなければできないユニークな研究体制を作られました。

いつも目を細められた暖かい眼差しで、私たち後輩の行く末を見守っていただけるよう念じながら謹んでご冥福をお祈りいたします。なお、ご遺族の奥様の瑛子様、ご長女の美世様、ご長男の朋之様は下記の自宅におられます。

〒465 0027 名古屋市名東区丁田町29

静岡大学理学部生物地球環境科学科
和田秀樹

小惑星表面採集試料の初期分析 参加研究者の第1回公募について

表記の研究公募の案内がまいりましたので、お知らせいたします。

文部省宇宙科学研究所

MUSES-C サンプル分析検討委員会委員長
久城育夫

宇宙物質分析研究者各位

文部省宇宙科学研究所では、電気推進、自律航法、

帰還カプセルなど、近い将来の小惑星探査に必要な新しい宇宙工学技術を習得するため、2002年夏に打ち上げ予定の、工学試験宇宙機 MUSES-C 計画を推進しています。さらに本計画では、惑星科学の新しい戦略である「サンプルリターン」技術にも挑戦します。2006年夏に、近地球型小惑星1989MLの探査を終えて、総重量数gの表面物質を地球に持ち帰る予定です。採集場所が明らかでかつ地球環境と反応していない宇宙物質を地上の研究室にもたらすサンプルリターンミッションは、アポロおよびルナ計画以来約30年ぶりであり、国内外の注目を集めています。

このミッションの科学的成果を最大限に挙げるには、回収試料の初期分析とその後の詳細分析に供するための試料の管理・配分作業が、いかにシステムティックかつ正確に実施できるかにかかっています。そこで宇宙科学研究所では国内の各種分析手法の専門家にご協力頂き、MUSES-C サンプル分析検討委員会を発足させ、初期分析及び管理・配分作業の方針・実施方法などについて議論を深めてまいりました。

その結果、下記の要領で宇宙科学研究所と協力してMUSES-C 試料の初期分析を行っていただく研究グループを公募することになりました。広く分析研究者のご協力を賜わり、世界初の小惑星サンプルリターン探査から最大限の科学的成果を引き出したいと考えております。ぜひ皆様の積極的なご応募をお願い致します。

記

初期分析は、試料回収後一年以内に国際的に公募が出される詳細分析に先んじて、回収された試料全体の物性、化学的、岩石・鉱物学的特徴に関して基本的な記載を行い、データベースを作成することを目的としています。

初期分析の公募は、2000～2004年の間に3回行い、最終的に10グループ以内を選抜する予定です。今回の公募はその第1回に当ります。本公募で採用されたグループは、その後の最終審査を経て、2006年以降の初期分析に参加して頂くこととなります。本審査は書類審査および未知の試料の分析結果について行います。分析試料は、公平を期すために、予め準備されたものを宇宙科学研究所から配布致します。

分析審査の内容は、(1)分析内容およびその精度、(2)必要最小重量(特に破壊分析の場合)、(3)分析に要する期間等について行います。審査試料の配布は書類審査後、2000年6～8月の間でご希望日を予定していま

す。なお、試料を受領してから分析結果のレポートを提出して頂くまでの分析期間は、最長6ヶ月とします。

- ・募集締切り：2000年4月20日
- ・応募書類郵送先、および問い合わせ先：
文部省宇宙科学研究所・惑星研究系
(担当：矢野創 宛)
〒229 8510 神奈川県相模原市由野台3 1 1
Tel：042 759 8197, Fax：042 759 8457
e-mail：yano@planeta.sci.isas.ac.jp

・応募資格

- (1) 2006年のMUSES-C 試料回収の時点で、国内に活動基盤を持つ日本人研究者個人の単独、あるいは本人が研究責任者となるグループであって、応募提案通りかそれ以上のレベルの分析を実行できる見込みのある方。
- (2) 試料回収以前にも、ミッションのスケジュールに沿って、宇宙科学研究所が主催する初期分析のリハーサルなどに積極的にご協力頂ける方。

注

- (A) 海外の研究者を国内に呼び寄せるか(=論文は日本のアドレスから出す)どうかは、研究責任者の判断におまかせします。
 - (B) 国内の複数の研究グループが一つのグループとして申請することも可能です。
 - (C) 今回の公募にもれた方でも、第2回以降の公募に再応募できます。
 - (D) 初期分析のメンバーとなられても、その後の詳細分析には応募できます。
- ・提出書類(フォーマットは自由)
- (1) 分析課題
 - (2) 応募者(研究責任者)、共同研究者全員の略歴、研究業績
 - (3) 実施する分析手法の解説
 - (3) 使用する分析施設(今回の公募では、応募者の所属機関の分析装置を用いること)
 - (4) 期待される分析結果と精度
 - (5) 破壊・非破壊分析の区別
 - (6) 分析必要最小重量(審査の前提は総重量100 mg未満)
 - (7) 分析に必要な期間(6ヶ月未満)
 - (8) 希望する分析開始時期(2000年6~8月の間で指定してください。)

- (9) 試料の受領方法(郵送、または宇宙科学研究所にて受け取りのいずれかを明記。)

ご参考

(A) 審査・活動の流れ(予定)

- 2000年4月20日> 応募書類締切り
- 2000年6月> 審査用試料配布対象の決定
- 2000年6~8月> 試料の配布
- 2000年12月~2001年2月> 分析結果報告(本応募と同じ提出先へ)
- 2001年3月> 審査結果通達。第一次初期分析機関の発表
- 2002年7月> MUSES-C 打ち上げ
- 2002年> 第二回初期分析公募
- 2004年> 第三回初期分析公募(最終回)
- 2005年> 国内の初期分析全チームによる、模擬MUSES-C サンプルを使った初期分析全過程のリハーサル
- 2006年6月> 試料回収。初期分析活動開始

(B) その他の情報

目標天体・地球近傍小惑星1989MLに関する情報、ミッションプロファイル、サンプラー性能のデータなどの詳細に関しては、以下のURLをご参照下さい。内容は順次構築中です。

<http://planeta.sci.isas.ac.jp/MUSES-C/>

以上

第37回理工学における同位元素研究発表会

発表論文募集

日本地球化学会共催の標記の研究発表会が下記の要領で開催されます。

講演(口頭発表およびポスター発表)を募集しておりますので、奮ってご応募・ご参加下さい。

会期：2000年7月3日(月)~7月5日(水)

会場：国立教育会館(千代田区霞ヶ関3 2 3)

講演申し込み方法：

所定の申込書(1件1通)にて申し込む。申込書は下記宛請求して下さい。

〒113 8941 東京都文京区本駒込2 28 45

日本アイソトープ協会学術課内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

Tel：03 5395 8081, Fax：03 5395 8053,

e-mail gakujuitsu@jrias.or.jp

発表申込締切：2000年2月29日(火)

講演要旨：発表申込があり次第、所定の原稿用紙をお

送りいたします。

講演要旨原稿締切：2000年4月14日(金)

参加費：2,000円(学生は無料)

第48回質量分析総合討論会(2000)のご案内

主催：日本質量分析学会

共催：日本化学会，日本農芸化学会，日本生化学会，
日本分析化学会，日本薬学会，日本地球化学
会，日本原子力学会

協賛：応用物理学会，原子衝突研究協会

会期：2000年5月10日(水)～5月12日(金)

会場：名古屋工業研究所(名古屋市中熱田区六番3 4 1)

討論主題：質量分析に関する話題全般

概要：総合シンポジウム「質量分析，20世紀の総括と
21世紀に向けての展望」，シンポジウム「プロ
テオミックスから構造生物学へ」，「内分泌かく
乱化学物質と質量分析」，「加速器質量分析技術
の現状と応用」。その他例年通り，一般講演(口
頭発表およびポスター発表)やワークショップ
も行います。

特別講演：Professor Martin F. Jarrold (Northwest-
ern University)

懇親会：2000年5月11日(木) 名古屋ガーデンパレス

連絡先：名城大学薬学部

質量分析総合討論会事務局

原田健一

Fax：052 834 8780，Tel：052 832 1781 (333)

e-mail：kihara@meijo-u.ac.jp

http://chem2.chem.nagoya-u.ac.jp/

mass/index.html

人事公募のお知らせ

下記のような人事公募の案内が参りましたのでお
知らせいたします。

東京都立大学大学院理学研究科化学専攻教授公募

- (1) 募集人員：教授 2名
- (2) 専門分野：環境化学，無機化学，分析化学，核・
放射化学，宇宙・地球化学など
- (3) 応募資格：博士の学位を有すること
- (4) 担当科目：専門科目と一般教養の授業，学生実
験，演習
- (5) 必要書類：(a)履歴書，(b)業績リスト[論文と総説
は分けること(特に重要な論文5編以内に印を付け

ること)，国際会議等の招待講演，科研費・研究補
助金の採択状況，学会での活動等]，(c)主要論文の
別刷り(10編以内)，(d)これまでの研究概要および
将来の研究の展望(2,000字程度，最初に専門分野
に関するキーワードを3個以内記入すること)，(e)
教育に対する抱負(500字程度)，(f)推薦者2名以内
(外国人研究者も可)の氏名と連絡先

(6) 採用時期：2001年4月1日予定

(7) 応募締切：2000年4月末日

(8) 応募方法：必要書類一式を書留便にて下記宛に送
付(封筒に「教授応募書類在中」と朱書きするこ
と)

〒192 0397 東京都八王子市南大沢1 1

東京都立大学大学院理学研究科化学専攻

主任 加藤 直

研究員募集のお知らせ

下記のような研究員募集の案内が参りましたのでお
知らせいたします。

茨城県警察職員(科学捜査研究所研究員，地方公務員
上級相当)募集

職種：化学 1名

職務内容：X線マイクロアナライザ，X線回折装置，
蛍光X線分析装置他を用いた物質の鑑定
研究及び原子力事故等における犯罪鑑識，
分析

資格要件：次のいずれかに該当する方

1. 理工学部系の原子(力，炉，核)，エネルギー，
放射線学科等で原子力或いは放射線関係の専門分野
を専攻した方
2. 理工学部系の化学系学科で放射線化学関係の専門
分野を専攻した方
3. 理工学部系出身の方で放射線取扱主任者又は核燃
料取扱主任者或いは原子炉主任技術者の国家資格を
持つ方

なお，受験年齢，試験日，採用日等は未定(詳細な
募集要項4月，一応6月下旬試験，10月又は13年4月
採用の予定)ですので詳細についてはお問い合わせく
ださい。

問合せ先：〒310 8550 水戸市笠原町978番地6

茨城県警察本部警務課採用係

Tel：0120 3140 58，または029 301 0110，

内線3032(又は科学捜査研究所第2研究室内線5201)

**Second International Conference on
Fog and Fog Collection**

(第2回霧と霧水捕集に関する国際会議)論文募集

表記シンポジウムの案内が参りましたのでお知らせいたします。

会期：2001年7月15日(日)～20日(金)

会場：ホテル・ニューファンドランド(カナダ・セントジョンズ)

主なテーマ：霧の物理，化学，気象学，予報，リモートセンシング，霧の沈着と植生との相互作用，露の研究，発展途上国における霧水捕集プロジェクト，沿岸海洋での人間活動に及ぼす霧の影響(特別セッション)

アブストラクト締切：2000年9月1日必着。アブスト

ラクトには審査がある。執筆要領，送付先(下記と異なる)などは下記に問合せのこと。

web サイト：

URL：http://www.tor.ec.gc.ca/armpp/fog/icffc2.html

連絡先：Dr. Robert Schemenauer(Conference Chair)

Second International Conference on Fog and Fog Collection, P. O. Box 81541, 1057 Steeles Avenue West, Toronto, Ontario, Canada M2R2X1,

fax 1 416 739 4211,

e-mail: robert.schemenauer@ec.gc.ca.

国内連絡先：山本 哲

(a member of the Science Committee)

〒305 0052 茨城県つくば市長峰1 1

Tel : 0298 53 8619 , Fax : 0298 55 7240

e-mail : ayamamot@mri-jma.go.jp

**ニュースへ記事やご意見をお寄せください
(次号よりニュース担当幹事が変わります)**

次号より、ニュース担当幹事が下記に変わります。今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いいたします。次号の発行は2000年6月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は4月下旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

中井俊一

〒113 0032 東京都文京区弥生1 1 1

東京大学地震研究所

Tel : 03 5841 5698 (直通)

Fax : 03 5802 3391

e-mail : snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

地球惑星科学関連学会 連絡会ニュース

No. 19

(1999年12月)

記事:

- 地球惑星科学関連学会2000年合同大会のお知らせ
2000年合同大会九州大学LOC
- 地球惑星科学関連学会連絡会第18回会合議事録

地球惑星科学関連学会2000年合同大会 のお知らせ

2000年合同大会九州大学LOC

会期: 2000年6月25日(日) - 28日(水)
会場: 国立オリンピック記念青少年総合センター

各種登録開始・締切日

- 講演登録
登録開始: 2000年1月12日
最終締切: 2000年3月3日午後5時
- 参加登録
登録開始: 2000年1月12日
最終締切: 2000年4月14日午後5時
- 青少年総合センターへの宿泊登録
登録開始: 2000年2月1日
最終締切: 2000年4月14日午後5時

上記の各種登録は下記の合同大会ホームページから行なうことができます。

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

どうしても電子投稿・登録の手段が確保できない方は、下記にご連絡下さい。

- 地球惑星科学関連学会 2000年合同大会 組織委員会
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻内
E-mail: loc2000-question@denji102.geo.kyushu-u.ac.jp
Fax: 092-642-2685

目次

- § 1 合同大会案内サマリー
- § 2 セッション案内
- § 3 個人情報登録, 支払登録, 参加登録, 講演登録, 宿泊登録
- § 4 投稿費および参加費
- § 5 青少年総合センターへの宿泊
- § 6 大会組織委員会からのお知らせ

§ 1 合同大会案内サマリー

下記の URL に 2000 年合同大会に関する情報および各種登録ページが置かれています。

合同大会ホームページ

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

詳しくは上記のホームページをご覧ください。情報は随時更新しますので、参加者は是非、時々ご覧いただくようお願い致します。

§ 1. 1 各種の登録 (§ 3 参照)

以下の登録はすべて上記ホームページから行なって下さい。

- 1) 個人情報登録
- 2) 支払登録
- 3) 参加登録
- 4) 予稿集原稿登録
- 5) 宿泊登録

1) ~ 3) は参加者全員に必須です。2)、3) を行なうためには、前もって1) が必要です。ただし、昨年度登録済の方は再度行なう必要はありません。講演申し込みをされる方は1) ~ 3) に加えて4) 予稿集原稿登録を行なってください。共著の場合は、共著者についても1) が必要です。ご注意ください。

会場の青少年総合センターへの宿泊を希望される方は、1) ~ 3) に加えて、5) 宿泊登録 (§ 5) を行なってください。

*当日発表される方も参加登録が必要です。昨年は参加登録をされずに、会場で直接発表される演者が多数いましたので、ぜひ事前登録されることをお勧めします。

§ 1. 2 住所変更

プログラムおよび予稿集 CD-ROM は、事前参加登録者のみに5月末頃に発送される予定です。転勤・卒業等で住所変更が生じた方は、合同大会ホームページ

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

上で、4月30日までに住所変更手続きを行なってください。

§ 1. 3 各種登録締切日および費用

- 予稿集原稿登録 (§ 4. 1 参照)
締切: 3月3日(金) 午後5時
投稿費 (1件につき): 1,000 ~ 5,000円
図の追加料金: 1,000円

●参加登録 (§ 4. 2 参照)

締切: 4月14日(金) 午後5時

参加費: 一般 6,000円, 学生 3,000円

●宿泊登録 (§ 5 参照)

締切: 4月14日(金) 午後5時

(但し, 定員を超えた場合にはこの前に締め切られます。)

Aコース (合同大会のみ参加される方用)

6月25日からの3泊4日固定スケジュールで

宿泊費(一括): 8,500~16,000円

Bコース (合同大会とWPGMの両方に参加される方用)

6月25日からの5泊6日固定スケジュールで

宿泊費(一括): 13,660~23,800円

§ 1. 4 保育希望の方へ

合同大会開催期間中に、1-6歳児の託児サービス(利用時間に
応じて実費負担)をご希望の方は以下のアドレスまで、電子メー
ルでご連絡ください。上記以外にも、0歳児のいらっしゃる方、
就学児童をお連れの方なども別途ご相談に応じます。保育室につ
いての質問なども承りますので、下記までご連絡ください。

2000年合同大会保育室実行委員会

幹事: 海洋科学技術センター

海底下深部構造フロンティア 木戸ゆかり

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15

E-mail: kidoy@jamstec.go.jp

§ 2 セッション案内

講演要旨の投稿は、1~2月中に合同大会ホームページ (§
3参照) 上で行なってください。最終締切りは3月3日(金)で
す。暗くならないためスライドが使用できないセッション会場が
ありますので、講演申込みの時ご注意ください。電子投稿に関する
質問は下記で受け付けます:(土日・祝日を除く)

●地球惑星科学関連学会 2000年合同大会 登録事務局

〒530-0001 大阪市北区梅田2丁目4番9号

サンケイビル本館7階 株式会社ジェイコム内

E-mail: earth@jtbc.com.co.jp

Fax: 06-6456-4105

どうしても電子投稿の手段が確保できない方は下記にご連絡下さ
い。

●地球惑星科学関連学会 2000年合同大会 組織委員会

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻内

E-mail: loc2000-question@denji102.geo.kyushu-u.ac.jp

Fax: 092-642-2685

§ 2. 1 セッション一覧

それぞれのセッションについての問い合わせは、「合同大会ホ
ームページ」に書かれている各セッションの連絡先へお願いしま
す。上記ホームページに置かれているセッション一覧リストを以
下に示します。

セッション記号: <和文短縮名> (連絡先学会) セッション申込者
氏名

Aa: <地球史> (指定しない) 高野 雅夫

Ab: <地球内部物性・深部構造> (指定しない) 井上 徹

Ac: <放射性廃棄物地層処分> (指定しない) 吉田 英一

Ad: <地学教育> (指定しない) 根本 泰雄

Ae: <データの嵐> (指定しない) 林 祥介

Af: <衝突> (指定しない) 三浦 保範

Ag: <地震関連電磁気現象> (指定しない) 長尾 年恭

Ah: <対流> (指定しない) 中島 健介

Ai: <地震総合フロンティア研究> (指定しない) 長尾 年恭

Ca: <バクテリアバイオマーカー> (日本地球化学会) 鈴木 徳行

Cb: <地球表層炭素循環> (日本地球化学会) 川幡 徳高

Da: <地殻変動> (日本測地学会) 田部井 隆雄

Db: <測地技術> (日本測地学会) 花田 英夫

De: <測地理論> (日本測地学会) 花田 英夫

Ea: <磁気圏・電離圏> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 品川 裕
之

Eb: <電離圏・熱圏・中間圏> (地球電磁気・地球惑星圏学会)
石井 守

Ec: <古地磁気・岩石磁気> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 小
玉 一人

Ed: <対流圏・成層圏> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 村山 泰
啓

Ee: <宇宙プラズマ> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 家森 俊彦

Eg: <太陽圏> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 小島 正宜

Ek: <地球内部電磁気> (地球電磁気・地球惑星圏学会) 歌田 久
司

Ei: <磁気圏構造とダイナミクス> (地球電磁気・地球惑星圏学
会) 家森 俊彦

Ga: <変形微細構造・物性> (日本地質学会) 金川 久一

Gb: <古気候・古海洋> (日本地質学会) 多田 隆治

Gc: <地質一般> (日本地質学会) 天野 一男

Ka: <マントルプロセス> (日本岩石鉱物鉱床学会) 小畑 正明

Kb: <オフィオライト> (日本岩石鉱物鉱床学会) 荒井 章司

Ma: <地惑物質科学> (日本鉱物学会) 藤野 清志

Mb: <鉱物物理化学> (日本鉱物学会) 赤松 直

Mc: <生命・水・鉱物相互作用> (日本鉱物学会) 赤井 純治

Pa: <天体核物理と太陽系科学> (日本惑星科学会) 寺沢 敏夫

Pb: <惑星物質科学> (日本惑星科学会) 永原 裕子

Pc: <惑星科学> (日本惑星科学会) 倉本 圭

Pd: <金星探査の科学> (日本惑星科学会) 今村 剛

Pe: <木星型惑星> (日本惑星科学会) 吉田 敬
Pf: <リング・ディスク系> (日本惑星科学会) 吉田 敬

Qa: <第四紀> (日本第四紀学会) 鈴木 毅彦

Sa: <地震発生の物理> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sb: <強震動/災害> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sc: <地震諸現象/地震一般> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sd: <海半球観測研究の進展> (日本地震学会) 飯高 隆
Se: <地殻構造> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sf: <リソスフェアの温度構造> (日本地震学会) 山野 誠
Sg: <地盤構造/震動> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sh: <サイスマテクトニクス> (日本地震学会) 小菅 正裕
Si: <地震計測/解析法> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sj: <地震発生帯> (日本地震学会) 小平 秀一
Sk: <地震活動> (日本地震学会) 小菅 正裕
Sl: <活断層と古地震> (日本地震学会) 小菅 正裕

Va: <マグマ> (日本火山学会) 中田 節也

Vb: <火山活動> (日本火山学会) 中田 節也

Xa: <青少年セミナー> (LOC) 島田允堯

Za: <フューチャーセミナー> (LOC) 島田允堯

§ 3 個人情報登録 支払登録 参加登録 講演登録 宿泊登録

上記の全ての登録は § 1 で書いた「合同大会ホームページ」にて行なって下さい。

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

登録内容は以下のとおりです:

1. 個人情報登録 (個人情報 ID 番号 取得)
2. 支払登録
3. 参加登録, 予稿集原稿登録, 宿泊登録

●個人情報登録と個人情報 ID 番号

*昨年度個人情報登録をされた方:

ID 番号は今年度も有効ですので再登録は必要ありません。

所属や身分が変わった方は「合同大会ホームページ」において個人情報変更を必ず行って下さい。ご自分の ID 番号やパスワードを忘れた方は「合同大会ホームページ」の「各登録方法について」にアクセスして問い合わせすることができます。

*昨年度個人情報登録されなかった方(共著者を含む):

まずは

個人情報登録

を行なっていただき、

個人情報 ID 番号

を取得して下さい。登録された個人情報は、個人情報 ID 番号によって参照され、参加登録、予稿集原稿登録、宿泊登録、支払登録に利用されます。この際、講演者だけでなく共著者も個人情

報 ID 番号の登録が必要です。共著者の個人情報 ID 番号が登録されていない場合は、予稿集に共著者名が載らないこととなりますのでご注意ください。個人情報登録後は、著者リストには個人情報 ID 番号を入力するだけで OK です。共著者がすでに個人情報登録を済ませている場合は、ID 番号を「合同大会ホームページ」にて検索できます。

個人情報登録のために必要な情報としては以下を予定しています:

氏名(漢字, カタカナ, 英語) 姓と名別々に
所属学会(複数選択式)
所属機関名(漢字, カタカナ, 英語)
所属機関名略称(漢字, 英語)(表示用)
所属機関住所(漢字, 英語)
身分(学生, 一般 選択式)
学生証番号(学生の場合)(学生確認用)
一般の場合タイトル(教授, 助教授, 助手, 等)
TEL, FAX, E-mail

これらのデータは、次年度以降の合同大会への各種登録の基礎データとして保存される予定です。

●支払登録

「合同大会ホームページ」をご覧ください。

●参加登録, 予稿集原稿登録, 宿泊登録

詳細は § 1 に書いた「合同大会ホームページ」

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

をご覧ください。必要な情報は1999年大会とはほぼ同じです。予稿集原稿は原則として、通常テキスト形式のみとします。図については、図処理用追加料金1,000円で受け付ける予定です。

●プログラム編集作業

現段階では仕様は未定です。各セッションのセッションマスター1名(提案者, 連絡先, コンビナー等のうちの1人)が、プログラム編集用のホームページにて作業を行います。

§ 4 投稿費および参加費

クレジットカード払いまたは郵便振り込みが可能です。

§ 4. 1 予稿集原稿登録料

受付日時

| | |
|-----------------|--------|
| ~2月 4日(金) 午後5時 | 1,000円 |
| ~2月 25日(金) 午後5時 | 1,500円 |
| ~3月 1日(水) 午後5時 | 2,000円 |
| ~3月 2日(木) 午後5時 | 3,000円 |
| ~3月 3日(金) 午後5時 | 5,000円 |

予稿集原稿に図を入れた場合の、図処理用追加料金は1,000円です。

§ 4. 2 参加費

事前登録：4月14日（金）午後5時まで

一般 6,000円

学生 3,000円

当日登録：大会期間中の会場の総合受付にて、現金払いのみ。

（大会当日は午前8時30分～午後4時の予定）

一般 9,000円

学生 6,000円*

（学生の当日登録は、ホームページ上にある学生証明書に指導教官の印と必要事項を記入したものをその場で提出した場合のみ、認められます。無給の研究生も学生料金で受け付けますので、証明書を提出して下さい。）

予稿集原稿登録料と参加費は（センター宿泊の場合は宿泊費も）一括請求されます。クレジットカード払いの場合は登録したカードから自動的に引き落とされ、郵便振り込みの場合は4月14日以降に振り込み用紙が郵送されます。郵便振り込み期限は5月31日（水）です。

§ 4. 3 取消手数料

●振込後、参加をとりけされても予稿集原稿登録料と参加費の返金はできませんので、あらかじめご了承ください。また、振込前に取り消される、または当日会場にこなかった場合、予稿集原稿登録に関しては大会後、請求書を送りますので必ずお支払いください。

●宿泊についてのみ、以下の取消手数料となっています。

2000年6月9日（金）まで：無料

2000年6月10日（土）～15日（木）：1,000円

2000年6月16日（金）以降：全額（返金しない）

§ 5 青少年総合センターへの宿泊

大会会場の青少年総合センター附属の宿舍の宿泊予約の締め切りは4月14日です。但し、確保しました部屋数には限りがありますので、申し込み数が定員を超えた場合にはその前に締め切ることもあります。宿泊予約は以下のホームページ上でのみ行っており、郵便、FAX等ではできません。

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/>

宿泊は、合同大会のみ参加される方向けのAコースと合同大会とWPGMの両方に参加される方向けのBコースの2つのコースがあります。Aコースは6月25日から28日朝までの3泊一括のみ、Bコースは6月25日から30日朝までの5泊一括のみを受け付けます。チェックインはいずれのコースも6月25日にセンター棟103号室（当日の大会受付と同じ部屋）で午後5時から午後9時までに行ってください。午後9時以降のチェックインはできませんのでご注意ください。

部屋はすべて個室ですが、ビジネスホテルタイプ（バス・トイレ付き）とユースホステルタイプ（バス・トイレ共同でベッドメーキングは利用者が行う）の2種類があります。料金は以下の通りです。

Aコース

ビジネスホテルタイプ（朝食なし） 14,500円

ビジネスホテルタイプ（朝食付き） 16,000円

ユースホステルタイプ（朝食なし） 8,500円

ユースホステルタイプ（朝食付き） 10,000円

Bコース

ビジネスホテルタイプ（朝食なし） 23,800円

ビジネスホテルタイプ（朝食付き） 26,310円

ユースホステルタイプ（朝食なし） 13,660円

ユースホステルタイプ（朝食付き） 16,190円

*上記宿泊料金は、合同学会九大LOCが担当する宿泊受け付けの料金です。引続き開催されるWPGM期間中のみ宿泊される方には、WPGM実行委員会が別途宿泊プランを用意する予定です。なお、合同大会とWPGMでは宿泊受け付けに関わる諸経費等の違いにより宿泊料金が異なるかもしれませんが、ご了承下さい。

§ 6 大会組織委員会からのお知らせ

§ 6. 1 電子化の継承および合同大会参加費・投稿料について

1999年の合同大会では、北大LOCの大変なご尽力により、今後どの機関がLOCを引き受けても、電子化による合同大会参加費・投稿ができる仕組みを目指した構築がなされました。今年度もこの方式を継承しました。機関によっては設備の整合性や操作入力量の点で、皆様にご迷惑をお掛けしたり、戸惑いを与えることも多々あることと思われませんが、今後の合同大会の円滑な運営のために、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

今回の大会でも、締切間際の事務量の集中を避けるために予稿集原稿登録料と参加費の傾斜方式を採用することにしましたが、この傾斜は前回と同様にきつくなっています。参加費の値上げを1000円しましたが、今年度も従来どおり学生会員の登録費は安くしています。学生かどうかの同定のために、学生にとっては手続きが少し増えていますが、合同学会の主旨をご理解いただき、ご協力をお願い致します。

§ 6. 2 合同大会当日の受付時間について

合同大会期間中の受け付けは、以下の時間に開設する予定です。

大会前日

24日（土） 受付デスクは開かない

大会期間中の受付

25日（日） AM 8:30～PM 4:00 センター棟 103号室

26日（月） AM 8:30～PM 1:00 センター棟 103号室

PM 1:00～PM 4:00 センター棟 107号室

27日（火） AM 8:30～PM 4:00 センター棟 107号室

28日（水） AM 8:30～PM 4:00 センター棟 107号室

宿泊施設のチェックイン

25日（日） PM 5:00～PM 9:00 センター棟 103号室

§ 6. 3 懇親会場

ポスター会場近くのレセプションホールに最終日を除く毎夕、コーヒーなどを飲みながら議論・歓談できる空間を設ける予定です。

す。

§ 6. 4 展示申請

個人・企業などによる機器・書籍などの展示を希望される方は、「地球惑星科学関連の学術刊行物・最新機器展示会」の形で計画しております。詳細は、後日ホームページ上に案内掲示予定ですが、次の項目を文書に明記して、3月末までに申請して下さい。

- (1) 貴社名および所在地
- (2) 担当の方の所属部署、お名前、電話、Fax、E-mail等
- (3) 展示内容、必要スペース等

(宛先)

〒855-0843 長崎県島原市新山2-5643-29
九州大学 大学院理学研究科 島原地震火山観測所内
合同大会組織委員 企業展示担当 (松島 健)
Tel. 0957-62-6621 Fax. 0957-63-0225
E-mail. mat@sevo.kyushu-u.ac.jp

§ 6. 5 合同大会会場における会合申込みの募集

合同大会会期中に会合・集会を行う団体の部屋使用希望の申し込みを、引き続き受け付けております。申し込みは以下の5項目を明記の上、4月末日までに九大LOC会場係(loc2000-service@geo.kyushu-u.ac.jp)までメールにてお願いいたします。WWW上では申し込みません。

- 1) 会合名称
- 2) 申込み責任者とそのメールアドレス
- 3) 希望する部屋の大きさ (下表参考)
- 4) 希望する時間 (開始・終了時刻)
- 5) 食事の希望 or 不要

今回は、原則的にすべての会合から会場費を徴収することになりましたのでご留意下さい。会場費については下に示した通りです。会場費の徴収は、代々木センターの部屋使用料が決まって安くはないこと、当日全く使用しない部屋についてはキャンセルすることによってセンターに支払う会場費を抑えていることを踏まえて、会合主催者の受益者負担として請求するという趣旨に基づくものです。

また今回はWPGMと平行開催のため部屋数が限定されており、申し込みをされても必ずしも希望に沿えない場合があること(特に大人数の部屋や食事可能な部屋を希望される場合)をご了解いただき、早めに申し込みいただくようお願いいたします。

徴収する会場費の料金(1コマ当たり)は以下の通りです。

| | | |
|-------------|--------|---------|
| 定員150人を越える | ¥10000 | |
| 定員150人まで | ¥7000 | |
| 定員80人 | ¥4000 | |
| 定員40人 | ¥2000 | |
| 定員20人 | ¥1000 | |
| 定員80人(食事可能) | ¥16000 | (部屋代のみ) |
| 定員20人(食事可能) | ¥4000 | (部屋代のみ) |

部屋の有効利用のために2時間までを1コマの単位とします。ま

た定員は部屋にある椅子の数です。会合申し込みについてご不明の点がございましたら、遠慮なく会場係までお問い合わせ下さい。

§ 6. 6 2000年合同大会組織委員会の構成と連絡先

大会委員長: 柳 哮 > yanagi@geo.kyushu-u.ac.jp
実行委員長: 湯元清文 > yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
企画委員長: 島田允堯 > nshimada@geo.kyushu-u.ac.jp
企画委員: 山内敬明 > nyama@geo.kyushu-u.ac.jp
並木則行 > nori@geo.kyushu-u.ac.jp
広報委員長: 鈴木貞臣 > suzuki@geo.kyushu-u.ac.jp
広報委員: 川瀬 博 > kawastar@nbox.nc.kyushu-u.ac.jp
松島 健 > mat@sevo.kyushu-u.ac.jp
印刷物担当: 中村 智樹 <tomoki@geo.kyushu-u.ac.jp>,
北島 富美雄 <kita.jima@geo.kyushu-u.ac.jp>,
情報化委員長: 関谷 実 > sekiya@geo.kyushu-u.ac.jp
情報化委員: 吉岡祥一 > yoshioka@geo.kyushu-u.ac.jp
三好勉信 > miyoshi@rossby.geo.kyushu-u.ac.jp
中島健介 > ken-suke@deepconv.geo.kyushu-u.ac.jp

経理委員長: 中田正夫 > mnakada@geo.kyushu-u.ac.jp
経理委員: 池田 剛 > ikeda@geo.kyushu-u.ac.jp
大会幹事長: 飯島 健 > iijima@geo.kyushu-u.ac.jp
受付担当: 佐野弘好 > sano@geo.kyushu-u.ac.jp
会場担当: 石橋純一郎 > ishi@geo.kyushu-u.ac.jp
ポスター担当: 山内敬明 > nyama@geo.kyushu-u.ac.jp
機材担当: 宮本知治 > miyamoto@geo.kyushu-u.ac.jp
アルバイト担当:

守田治 > morita@weather.geo.kyushu-u.ac.jp
宿泊担当: 竹中博士 > takenaka@geo.kyushu-u.ac.jp
亀 伸樹 > kame@geo.kyushu-u.ac.jp
保育室担当: 並木則行 > nori@geo.kyushu-u.ac.jp
企業展示担当: 松島 健 > mat@sevo.kyushu-u.ac.jp
プログラム委員長:

村江達士 > murae@geo.kyushu-u.ac.jp
LOCプログラム委員:
高岡宣雄 > takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp
伊藤久徳 > itoh@weather.geo.kyushu-u.ac.jp
河野英昭 > hkawano@geo.kyushu-u.ac.jp

学会選出プログラム委員

★地球化学会

中井俊一 E-mail: snakai@eri.u-tokyo.ac.jp
石橋純一郎 E-mail: ishi@geo.kyushu-u.ac.jp

★測地学会

花田英夫 E-mail: hanada@miz.nao.ac.jp
田部井隆雄 E-mail: tabei@cc.kochi-u.ac.jp

★地球電磁気・地球惑星圏学会

早川 基 E-mail: ayakawa@stp.isas.ac.jp
綱川 秀夫 E-mail: htsuna@geo.titech.ac.jp

★地質学会

- 佐野弘好 E-mail: sano@geo.kyushu-u.ac.jp
 坂井 卓 E-mail: taku@geo.kyushu-u.ac.jp
- ★岩鉱学会
 有馬 眞 E-mail: arima@ed.ynu.ac.jp
 池田 剛 E-mail: ikeda@geo.kyushu-u.ac.jp
- ★鉱物学会
 藤野清志 E-mail: fujino@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
 松井 正典 E-mail: matsui@geo.kyushu-u.ac.jp
- ★惑星科学会
 倉本圭 E-mail: keikei@neko.lowtem.hokudai.ac.jp
 中村智樹 E-mail: tonoki@geo.kyushu-u.ac.jp
- ★第四紀学会
 中村 俊夫 E-mail: g44466a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
 鹿島 薫 E-mail: kashima@geo.kyushu-u.ac.jp
- ★地震学会
 竹中博士 E-mail: takenaka@geo.kyushu-u.ac.jp
 鷲谷 威 E-mail: sagiya@gsi-mc.go.jp
- ★火山学会
 中田節也 E-mail: nakada@eri.u-tokyo.ac.jp
 清水 洋 E-mail: shimizu@sevo.kyushu-u.ac.jp
- ★資源地質学会
 今井 亮 E-mail: akira@tsunami.geol.s.u-tokyo.ac.jp
 本村慶信 E-mail: ymoto@geo.kyushu-u.ac.jp

●お問い合わせ先

■大会全般・大会プログラムなど内容に関して

地球惑星科学関連学会 2000 年合同大会 組織委員会
 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
 九州大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻内
 E-mail: loc2000-question@denji102.geo.kyushu-u.ac.jp
 Fax: 092-642-2685

■参加登録・予稿集原稿登録など実務作業に関して

地球惑星科学関連学会 2000 年合同大会 登録事務局
 〒530-0001 大阪市北区梅田 2 丁目 4 番 9 号
 サンケイビル本館 7 階 株式会社ジェイコム内
 E-mail: earth@jtbcom.co.jp
 Fax: 06-6456-4105

(お問い合わせ受付時間)

月曜日～金曜日 9:30～18:00(土日・祝日を除く)
 時間外にいただきましたお問い合わせにつきましては返答が
 次営業日になりますのでご注意ください。

日時: 1999 年 (平成 11 年) 6 月 10 日 (木) 18:10-20:30
 場所: 国立オリンピック記念青少年センター C309 号室
 出席者: 35 名

資源地質学会; 森下 祐一
 地球電磁気・地球惑星圏学会; 綱川 秀夫, 早川 基,
 小野 高幸, 岩上 直幹
 日本海洋学会; 吉田 次郎
 日本火山学会; 津久井 雅志
 日本岩石鉱物鉱床学会; 大谷 栄治, 吉田 武義
 日本気象学会; 住 明正
 日本鉱物学会; 村上 隆, 土山 明
 日本地震学会; 飯高 隆, 島崎 邦彦, 小菅 正裕
 日本測地学会; 加藤 照之, 小菅 俊宏
 日本地球化学会; 篠原 宏志 (欠席)
 日本地質学会; 公文 富士夫
 日本惑星科学会; 阿部 豊, 田近 英一
 日本第四紀学会; 中村 俊夫
 日本水文科学会; 鈴木 裕一
 1999 年合同大会実行委員会; 島村 英紀,
 宇井 忠英, 渡部 重十, 林 祥介, 山本 哲生
 2000 年合同大会実行委員会; 柳 哮, 湯元清文,
 村江 達士, 島田 允莚, 関谷 実
 2000 年 WPCM プログラム委員長; 佐竹 健治
 地球惑星科学関連学会合同大会運営事務局長; 本蔵 義守
 地球惑星科学関連学会連絡会幹事; 坪井 誠司

議題

I. 承認事項

1. 前回の議事録 (案) 確認
 原案どおり承認した。

II. 報告事項

1. 各学会からの報告。
 各学会の今後の予定については以下の通り。
 惑星科学会

1999 年度秋季講演会 11 月 13 日～15 日 仙台
 鉱物学会

1999 年 9 月 23 日～9 月 26 日 茨城大学
 岩石鉱物鉱床学会と鉱物学会を同時に開催する。

岩鉱学会 (鉱物学会と同時に開催)

1999 年 9 月 23 日～9 月 26 日 茨城大学

測地学会

1999 年 11 月 9 日～11 月 11 日 岐阜県根尾村
 GPS 国際シンポジウム 1999 年 10 月 18 日～22 日
 つくば国際会議場

主催: 測地学会, 地震学会, 火山学会他

地球電磁気・地球惑星圏学会

1999 年 11 月 9 日～11 月 12 日 東北大

火山学会

地球惑星科学関連学会連絡会第 18 回会合

議事録

1999年10月9～11日講演会（神戸大学），
11-12日現地討論会（神鍋火山）の予定

2000年秋は茨城大の予定

2001年秋は鹿児島島の予定

地球化学会

1999年9月29-10月1日（地質調査所）

地震学会

1999年11月17日～11月19日 仙台市

地質学会

1999年 年会： 1999年10月9日～11日 名古屋

2000年 総会： 2000年春； つくば（予定）

2000年 年会： 2000年9月28日～10月1日 島根大学

気象学会

1999年春季大会 4月26日～28日 東京

日本海洋学会

1999年度秋季大会 1999年9月16日～20日
北海道大学水産学部（函館）

2000年度春季大会 2000年3月27日～31日
東京水産大学（東京）

資源地質学会

1999年度年会 6月16日～18日 東京

資源地質学会シンポジウム

「海底熱水活動研究の現状とその鉱床探査への応用」

1999年6月17日午後 東京

水文科学会

1999年6月頃（場所未定）

第四紀学会

1999年8月23日～25日 京都大学

III. その他の報告及び審議事項

1) 1999年度合同大会について（湯元）

北大LOCから1999年合同大会の実施状況について報告があった。

(a) 事務局（渡部）

投稿した人数は1593人，事前登録は一般が910人，学生が531人で計1441人である。当日登録は10日現在で一般555人，学生252人で全体では2248人である。Webで受付をしたことにより当日の受付は楽になった。現在の見積もりでは予算をオーバーする可能性がある。以上の報告に対し，特に，登録料を払わない参加者や，講演者がいるので，それらに対する処置をより厳格にすべきではないかとの意見があった。

2) WPGM2000及び2000年合同大会について（湯元，佐竹）

現在合意されている日程は以下の通り。

2000年合同大会

日程：2000年6月25日（日）～28日（水）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

2000年WPGM

日程：2000年6月27日（火）～30日（金）

場所：同上

このうち，27，28日は会場は半分ずつとする。

a) 合同大会について（湯元）

九州大学でLOCを立ち上げた。北大LOCから九大LOCへの引継を11日15:00より行う。登録料については，WPGMを続けて開催することにより参加者の減少が見込まれるので値上げを考慮中であり，次回の連絡会で提案したい。

b) WPGMについて（佐竹）

7日にプログラム委員と実行委員の会合を持ち，今後の準備の進め方について確認した。組織委員長は入倉氏となった。実行委員長については連絡会で選出してほしい。合同大会期間中にAGU側と非公式な会合を持ち，日本側との分担について議論した。その結果，財政的負担はすべてAGUが引き受け，日本側の実行委員会は会場の手配やsocial programなどについて引き受けることになった。プログラム委員会では今後セッションの募集を行い，合同大会とのセッションの分担について各学会に協力をお願いすることになる。

以上の報告に基づき議論した。実行委員長については今後の連絡会体制とも関連するので次の議題で議論することになった。

3) 2001年以降の合同大会及び連絡会事務局の体制について

前回の連絡会で事務局長，幹事，前幹事より提案した会則（案）について各学会での議論の結果をまとめた。その結果，提案された会則（案）を承認する学会が過半数を占めたが，慎重な対応を求める意見も出たので，現在の運営要綱の第7条に基づいた形で幹事会を作り，そこで，2001年以降の合同大会の運営体制と，連絡会の運営体制としての会則のたたき台を作ることになった。幹事会のメンバーは議論の結果以下の通りになった。

会長： 大谷 栄治

庶務： 綱川 秀夫

渉外担当：吉田 武義

会計： 津久井 雅志

ニュースレター担当：原 辰彦

次期合同大会LOC：湯元 清文

オブザーバー：林 祥介、渡部重十、加藤照之、坪井誠司

WPGM 実行委員長については，改めて議論したが，結論がでなかったため，再度組織委員長に選考を依頼することとなった。

4) 次回連絡会は，次回合同大会会期中に開催する。日程は9月29日13:00～ 国立青少年センター（代々木）

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース 第19号

1999年12月11日発行

発行： 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会幹事会会長 大谷栄治

編集： 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会幹事会ニュースレター担当 原辰彦